

## ご退職に寄せて

雑誌名	文学論藻
巻	94
ページ	1-3
発行年	2020-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00012179/">http://id.nii.ac.jp/1060/00012179/</a>



## ご退職に寄せて

令和二年三月、中山尚夫教授・山崎甲一教授がご定年により、また蓮見行廣教授も同じ時期にご退職の時を迎えられることになりました。同じ学科の私どもにとって、誠に心寂しいことであり、近世文学・近代文学・書道というそれぞれの分野の三本の大きな柱を失う思いでおります。お名残を惜しむ気持ちは尽きませんが、中山尚夫教授・山崎甲一教授・蓮見行廣教授のこれまでのお導きに、心より感謝申し上げます、ここに『文学論藻』第九十四号をお三人の先生方の「退職記念号」といたしまして献上いたします。

中山尚夫教授は、東洋大学文学部国文学科助手として、一九七七年四月から勤務され、一九九一年には同講師、一九九五年には同助教授、二〇〇二年には同教授に就任されました。現在までに東洋大学文学部第一部・第二部日本文学文化学科主任、同大学院文学研究科日本文学文化専攻主任のほか、東洋大学通信部長、東洋大学文学部長、東洋大学評議員などの要職を歴任され、まさに「東洋大学の歴史」と共に歩まれ、大学教育の推進と学科・専攻の充実、発展に大きな役割を担ってこられました。大学専任教員として四十三年の長きにわたって、力を尽くされ、私どもの精神的な支えであり続けました。酒脱で寛容な性格であり、図書館の古書関係では貴重書を推薦するなど表方裏方として常に力を惜しまず行動する姿は、多くの学生・教員・事務の職員の方々からの敬愛を受けておりました。

近世文学をご専門とする中山尚夫教授は、『十返舎一九研究』により博士号（文学・東洋大学）を取得されるなど、とりわけ十返舎一九研究の重鎮として知られ、近世草双紙研究の業績が多く、所属学会は、日本近世文学会、国際浮世絵学会、全国大学国語国文学会でも古典文庫の翻刻・出版の仕事を中心に活躍され、斯界の研究の発展に多大なる貢献をなさいました。東

洋大学エクステンション課の公開講演会や講師派遣講座を通して、名調子で近世文学の魅力を学問的に説き、卒業生を含め学内外にその人柄を慕う人が多くおります。

山崎甲一教授は、東洋大学文学部国文学科助手として一九七四年四月から勤務され、一九七八年には鶴見大学女子短期大学部専任講師・同助教授を経て、一九九〇年には東洋大学文学部助教授、一九九五年には同教授に就任されました。現在までに東洋大学文学部第一部・第二部日本文学文化学科主任、同大学院文学研究科国文学専攻主任のほか、東洋大学通信部長、東洋学研究所長などの要職を歴任され、大学教育の推進と学科・専攻の充実、発展に大きな役割を担ってられました。東洋学研究所では、国際的な視点からアジア地域における共生思想プロジェクトを推進されるなど、東洋大学専任教員として 三十四年の長きにわたって貢献され、常に真摯な態度で、孤高であり学科の在り方にこだわりをもち続けた先生であります。

近代文学をご専門とする山崎甲一教授は、『夏目漱石の言語空間』にて博士号（文学 東洋大学）を取得され、明治・大正時代の文豪、とりわけ、夏目漱石、芥川龍之介の研究を中心に学会を牽引して、森鷗外、川端康成など、近現代文学・文化への批評などの研究をなされておりました。その著作は『芥川龍之介の言語空間』・『夏目漱石の言語空間』として笠間書院より刊行され、また論文集の刊行など多くの業績がございます。所属学会は日本近代文学会、全国大学国語国文学会、解釈学会、芸術至上主義文芸学会、川端康成学会、花袋研究学会などですが、学生指導においては作品を丁寧に読み解くことから始める堅実な方法論によって、中学校や高等学校の国語教員など多くの弟子が全国で活躍しております。

蓮見行廣教授は、書道（漢字）教育家、書家としてのご専門家としてご活躍になりましたが、一九九一年には東洋大学文学部講師として着任され、一九九五年には同助教授、二〇〇三年には同教授に就任されました。現在までに、東洋大学文学部

第一部・第二部日本文学文化学科主任、通信教育部学科長などの要職を歴任されました。大学専任教員として二十九年の長きにわたりご活躍を続けておられました。中でも特筆すべきは、文京シビックホールを初めとして、学外の会場にて東洋大学書展を連続して二十七回、毎年一月に大々的に開催されるという指導力を発揮し、東洋大学の名を高め、書道教育の推進と学科、書道教師の育成、発展に大きな役割を担ってられました。

蓮見行廣教授の書家としての芸術活動は、毎日書道展を中心に活躍され、漢字部審査員に就任、また日展で入選回数三十二回、特選受賞など、書道界を牽引されてこられました。

研究の方面においては、中国戦国を中心とした文字史および明末から清朝の書道、画禅室随筆と臨書、臨書法、呉昌碩の篆刻と側款法などが主たるテーマであり、書画の収集鑑定などをされ、学祖井上円了博士の書の収集家としても著名で、東洋大学に三十点、同井上円了記念博物館には六五点を寄贈されております。学生たちに書の魅力を伝えることで人気を博しておりました。

このような素晴らしい経歴の三人の先生方に対して、私ども身近な教員はもちろんのこと、多くの学生・卒業生が強く惹かれ、それぞれの範としてまいりました。構内で目にかかる機会が少なくなるのは寂しいばかりですが、今後のご健勝をお祈りするとともに、引き続き、私どもをお導き下さいますようお願い申し上げます。

令和二年二月

東洋大学文学部日本文学文化学科専任教員一同